醍醐寺蔵探要法花験記に見る和化漢文の用字―出典との比較から―

磯貝　淳一

一、はじめに―問題の所在―

醍醐寺蔵探要法花験記は、日本・中国それぞれに出典を持ち、日本と中国の説話がほぼ交互に排列される形をとる法華経霊験譚の集成である。その出典は、概ね日本の部が『大日本国法華経験記』、中国の部が『法華伝記』から採用されたものと考えられる。

筆者はこれまで、仏教説話・霊験記などのジャンルに属する和化漢文資料を取り上げ、そこに見られる様々な「和化漢文資料特有の」事象を明らかにしようとしてきた。それは大きくは、

①和化漢文と正格漢文との差異の問題

②和化漢文内部に見られる差異の問題

に分けられる。それぞれについて用語・用字の記述を行うことを通じて、和化漢文の文体範疇と言語事象との関わりを考えてきたことになる。そこから、「表記主体の社会的属性」や「正格漢文への志向性」などを背景として、用語・用字に差異が認められること、その背景には共通の用字基盤とも言うべき「書き方」に基づいた文体範疇を認めることができるのではないかということを一応の方向性として見出すことができた。

しかし、先に述べた検討の中で扱った「個別の言語事象」を寄せ集めた結果が「用字基盤」乃至は「文体範疇」を明らかにすることに繋がるのかという問題については、なお慎重になる必要があり、これらの概念を実際の資料においていかに捉えていくかが現在の大きな課題の一つと言えよう。

本稿では、醍醐寺蔵探要法花験記と出典説話との比較から、「出典との差異」を明らかにする。その中で、本資料成立に際して「漢字文」がどのような質的転換を遂げたのか、またそれが漢文の「和化」と直接的に関わる問題であるのかという点について若干の考察を加えることとする。

二、量的構造から見た探要法花験記の変化―指標漢字の抽出―

前項で述べた〈「個別の言語事象」を寄せ集めた結果が「用字基盤」乃至は「文体範疇」を明らかにすることに繋がるのかという問題〉意識から、まずは本資料の用字の特徴を概観し把握するために、漢字使用の全体像を明らかにする。これまでもいくつかの論考において行ってきたことではあるが[1]、全体を把握しつつ、個別に比較検討すべき対象を見出すために、使用度数の一覧（使用度数51以上の漢字につき）を以下に示すこととする。

法 404
人 354
一 326
不 301
經 301
花 294
也 261
之 254
曰 252
時 236
大 228
有 224
誦 222
生 219
即 207
佛 197
以 193
是 193
天 176
此 173
者 173
我 171
師 163
來 158
後 122
其 154
見 150
三 147
如 144
聞 140
中 132
十 131
日 127
而 127
年 126
爲 124
僧 122
心 121
所 118
身 118
无 113
至 113
山 112
云 111
王 111
行 110
於 108
聖 106
入 90
出 88
得 87
又 83
上 82
五 82
若 82
四 80
寺 80
明 80
矣 80
言 80
願 80
門 79
二 78
世 77
持 75
汝 75
七 73
深 73
然 73
自 73
道 101
等 94
今 72
夢 72
淨 72
可 70
妙 70
比 70
夜 69
巳 69
乘 68
國 68
故 68
間 67
衆 66
諸 66
讀 66
住 65
子 65
下 64
方 64
丘 63
受 62
在 62
女 62
作 61
八 60
餘 60
知 59
事 57
從 57
本 57
苦 56
還 56
供 55
依 55
告 55
觀 55
語 55
成 54
悲 54
沙 54
說 54
往 53
念 53
何 52
樂 52
菩 52
部 52
香 52
六 51
力 51
千 51
皆 51
雖 51

更に、日本の部・中国の部[2]それぞれに比較を行うために、出典との比較対照が可能な説話を抽出し（全86話中74話）、その使用度数を出典資料と比較しつつ一覧したのが末尾に掲げた資料・表①である。

1．表は「出典」と「探要法花験記」とを並べて示す。日本の部・中国の部それぞれにつき対照している。

2．「比較対照が可能な説話を抽出」したため、日本・中国両部の漢字の合計は先の資料全体の使用度数より少なくなる場合が殆どである。

3．比較対照を一覧して行うことを可能にするため、参考までに表左端に数字を示すが、実際の使用度数が反映された「順位」とは異なる。（使用が同数の場合はこの順位を反映していない。）

表に「探・日本」とある日本の部説話と「探・中国」とある中国の部説話の漢字の使用状況を比較すると、漢字の順位が入れ替わることがあるものの、先の資料全体の結果と大きく異なることはなく、両部の漢字使用は近いと考えてよいようである。

但し、このことから分かるのは多く、「どのようなことが書かれているのか」という文章内容に関わる指摘である。文章の特徴の一つを示していることに違いはないが、「どのように書かれているのか」という文章表記の「質的な部分」には踏み込み得てはいない。

そこで、文章内容そのものに関わることなく、文章を構成する上で重要な役割を果たすと考えられる漢字を対象として考察を行うこととする。ここでは、「接続詞的用法」を担うと見なされる漢字群と「助字」表記として見なされる漢字群（但し、ここで取り扱うのは使用数のみであって、漢字群に付した呼称は一用法を取り立てた仮のものである）を対象として、検討を加えることとする。接続詞及び助字は漢文において広く使用が認められ、文章を構成する重要な単位であることから、複数の資料を比較する際の指標[3]として有意に働くと考えるためである。

先の表において、出典・探要法花験記共に使用が認められ、それぞれの用法が認められるのは、「時」「即」「然」「之」「也」「者」「而」「於」「矣」等である。

次に掲げた表②は、これらの漢字の順位と使用数をまとめたものである。

出典との比較を行う前に、探要法花験記内部での使用数につい

て、各漢字の順位から見た両部の構成は近似していると見てよいであろう。但し、「而」「於」「矣」については、日本の部において使用が少なくなっている。

表② 探要法花験記とその出典における各漢字の使用順位 (括弧内の数字は使用数)

	法華経験記	探・日本	法華伝記	探・中国
時	24 (261)	**12 (104)**	28 (52)	**9 (126)**
即	63 (161)	**15 (98)**	44 (40)	**14 (109)**
然	206(56)	**82 (35)**	191(13)	**72 (37)**
之	14 (316)	**7 (126)**	12 (71)	**12 (113)**
也	49 (49)	**8 (122)**	48 (38)	**7 (137)**
者	53 (177)	**32 (61)**	37 (47)	**13 (110)**
而	80 (130)	**65 (40)**	10 (79)	**24 (87)**
於	47 (87)	**66 (39)**	27 (52)	**33 (66)**
矣	34 (224)	**107 (29)**	130 (19)	**47 (51)**

続いて日本・中国両出典との比較からは、「時・即・然」のグループでは、「時」「即」「然」それぞれが探要法花験記日中両部ともに順位を上げている(使用が増えている)ことが分かる。探要法花験記成立に際して、これらの漢字の担ういずれかの用法が多く用いられるようになったことを予測させるものであるが、具体的な検討は次項に譲る。

「之・也・者・而・於・矣」のグループでは、大きな変化は「也」「者」が日中両部ともに順位を上げている点、特に「也」の増加が著しい点に認めることができる。また、「而」「矣」では、日本・中国両部が一方は増加、他方は減少という反対の変化を見せている。

以上指摘した点がいかなる意味をもつのかという問題については、更に各漢字の用法を詳細に検討しなければならない。しかし、探要法花験記の漢字の使用が大きくは日本・中国両部類似の構成によっている点、出典から大きく使用の増える場合が存する点を指摘し得るかと思う。

三、指標漢字の用法

前項において取り上げた各字の用法を概観する。

I 「時・即・然」(接続詞的用法を担うグループ)

[時] 全230例

①其時菩薩深垂哀憐而告曰汝等不知否（下三〇オ六）
［「時」一般の意・141例］
②乘船還焉時夢覺感涙嗚咽千行々々云々（上一七オ七）
③禮拜菩薩叩頭求哀也時菩薩問曰汝等住此處經幾星霜（下二九ウ一）
［接続詞的用法・72例］
④于時山地動搖門窓振裂（上一九オ六）　［「于時」・12例］
⑤我舌不朽成金牒而時々放光（上二二オ三）
［「時々」「日時」など熟語として・5例］

［即］全207例
①譯新法花經一部七卷二十八品畢即至明年春正月造金字法花經七寶以爲莊嚴（上四ウ五）
②豈聞西方乎即發願日夜誦經（上三〇ウ八）［接続詞的用法・128例］
③願師取爲我成福矣時師即告衆掘地得三千錢（上一一オ四）
④如是語已即失不見（上二四オ一一）
［「即時」の意となる副詞的用法・79例］

［然］全72例
①権大夫參詣六波羅寺値遇講筵然車前有兩三尼（上二八ウ一）
［単独で順接あるいは逆接の接続詞的用法・38例］
②然則三世量功絶一代十箇譬喩德超四味（上三ウ四）
③年齡衰老月來病惱、然而其病不重行（上一三オ一二）
［「然則」「然間」など熟語として順接あるいは逆接の接続詞的用法・13例］
④靈山一會現於空中忽然見者已三五（上七ウ二）
⑤自然飲食在案前（上二四オ三）
［熟語として・21例］

II　「之・也・者・而・於・矣」（助字グループ）

［之］全239例
①當知此經是諸佛出世之本懷衆生成佛之直道也（上三ウ四）
［文中の助字・168例］
②即及曉更開眼悲涕衆僧問之答曰赤服二人來曰我是泰山府君
（上二〇ウ八）［文末の助字・71例］

［也］全259例
①師曰如是供養果報微妙諸佛所歎也（上五ウ一）
②隋朝智通禪師者河東人也（上一八ウ一〇）
③長安城寡女揚氏者少年亡父母及中年亡夫也（上三〇オ一〇）
［文末の助字・259例］

［者］全171例
①宋朝惠益禪師者廣陵之人也（上一七オ八）
②君若不能受持大乘滅罪者必受此等苦患（上二一ウ一）
［文中の助字・119例］
③得法花經五六卷綴爲紙衣見者寒心（上二七ウ七）
［人の意として・36例］
④童來曰我兜率天彌勒菩薩使者也（上一三ウ五）
［熟語として・16例］

［而］全127例

①行入於大寺以十種供而供養之（上六オ一〇）
②即以宋大始六年而卒矣（上一一オ六）　［文中の助字・127例］

［於］全105例
①至同七年冬於草堂寺譯新法花經一部七卷二十八品畢（上四ウ三）
②嘗遇風波乘船欲没於是慶一心擧聲誦法花經（上二三オ六）
［文中の助字・105例］

［矣］全80例
①是不可思議也凡如是等感靈難以稱記矣（上一二ウ一一）
②諸僧驚怖開四面戸集見之恐歎矣（下二八オ八）
［文末の助字・80例］

以上、指標漢字として取り上げた9種の漢字について、大凡の用法の確認を行った。先に述べた「接続詞的用法」と「助字」については、殆どの漢字がそれを中心的用法としていることが用例数から確認されたかと思う。しかし、「時」「即」両字が接続詞的に働く場合については、両者ともに使用数の上からは「中心的」用法とは言い難い状況である。そこで、探要法花験記が出典から「時」「即」を増加させていくにあたって、どのような改変が施されているのかを、出典との比較から考えてみたい。

以下に掲げるのは、出典資料の原文に「時」「即」が「添加」された場合の例である[5]。

○時林通之聲所及受苦之人皆得解脱（探要法花験記・上二九オ一）
○・林誦之聲所及受苦之人皆得解脱（法華伝記・巻六第一五話）

○天性聡敏頻悟法花即生年十八啓母出家從師受業
（探要法花験記・下一〇オ七）
○天性聡利頴悟法花・生年十八啓母出家從師受業
（法華伝記・巻三第一〇話）

この例に見るように、探法法花験記と出典とを比較した場合、添加・削除によって漢字の出入りがある中で、接続詞が添加されることが多く、「時」「即」両字について見ると、

時・・・添加18例［接続詞］
　　削除1例［接続詞］
即・・・添加31例［接続詞27例　副詞4例］
　　削除3例［副詞］

のようになっている。接続詞的な用法を担う「時」「即」が探要法花験記に積極的に使用される様相が見て取れる。このことと、先の漢字使用の量的構造に見る両字の増加傾向とは関連のあるものと考えられる。更に、接続詞的用法が中心的であった「然」についても、

○遇鬼病吐血而死父母捨家間然虎狼不食
（探要法花験記・下二〇オ五）
○遭鬼病吐血而死父母捨塚間・狐虎犲狼敢不食
（法華伝記・巻一〇第七話）

のように添加の例が多く見られる（15例添加、削除はなし）。探要法花験記では出典に比して接続詞が多く使用される傾向があることが分かる。

また同様に、増加傾向の強かった「也」についても、

○經五箇年常以所着衣施常住大衆也

（探要法花験記・上二七オ一）

○經五年取身所著衣令弟子悉送常住施大衆・

（法華伝記・巻六第八話）

の様な例が見え、文末の助字としては、添加が49例、削除が1例と出典からの添加傾向が強い漢字であることが分かる。

筆者はこれまで、探要法花験記中国の部と法華伝記（出典資料）との比較を中心に、探要法花験記と出典との違いを探ってきた。その際、「時・即・然」の「話の展開を明示する」接続詞的用法が多用されていくこと、文末の指定の助字「也」が多用されることを明らかにし、そのことが漢字片仮名交じり文の注釈・説話資料である中山法華経寺本三教指帰注などに見られる「説話文体の特徴」と重なる性格のものではないかとの可能性を指摘した。今回、日本の部についても出典との比較を行った結果、中国の部同様の傾向を確認することができた。探要法花験記は、日本・中国大きく二つの異なる出典に基づきながらも、独自かつ共通の用字意識を持って一つの霊験記を成立させていることが分かる。

これら接続詞と文末助字の使用傾向は、和化漢文としての探要法花験記の文章にどのような意味を持つのであろうか。個々の用字法自体は中国における漢字文にも認められるものである。筆者はこの点について「中国に出典を持ち、正格漢文的な要素が大きい和化漢文資料では、措辞法・用語・用字の多くが正格漢文の範疇にあるため、これらの観点からは「和化」の事象を見出しがたい場合があった。しかし、出典との直接的な比較を通じ、探要法花験記の「説話文」への志向性に着目することによって、言語事象そのものの違いからだけではなく、それをどのように用いて章を組み立てるかという観点からの考察が可能になると考える。」との指摘を行った。その際には、和化漢文資料のみを検討の対象として、正格漢文との比較を行うことで探要法花験記の用字を位置付けることはなかった。そこで、本資料に比較的近い性格を持つ資料を選定し、漢字使用の実態を把握することを通じて、「和化」の有り様を探る手がかりとしたい。

四、中国漢文資料との比較

ここまで見てきた探要法花験記の漢字使用について、接続詞的用法を担う漢字（「時・即・然」）と文末の助字（「也」）とが和化漢文成立に際して加えられた大きな「変化」であった。この点を更に進め、漢文の「和化」の問題と関わらせて考えていくために、本資料と類似の性格を持つ中国の漢文資料における漢字使用の調査を行うこととした。

取り上げるのは「法華伝記」（先に使用した「出典部分」だけではなく、資料全体として）「華厳経伝記」「大唐西域求法高僧伝」「天台九祖伝」「浄土往生伝」の5資料である。成立は唐代から宋代にかけてと年代的に幅はあるものの、いずれも仏家の撰述にかか

る「伝」の性格を持つ資料である。これらの漢字使用（上位50位まで）をまとめたのが表③である。

探要法花験記における「時・即・然」グループ、「之・也・者・而・於・矣」グループそれぞれの使用分布と比較すると、以下のようにまとめることができる。

○「時・即・然」

表①②に認められるような「時」「即」の多用、また「然」の使用は中国漢文5資料には認めることができない。上位50位までの順位を見ると

法華伝記	時 32	即 42	然 なし
華厳経伝記	時 34	即 なし	然 なし
大唐西域求法高僧伝	時 なし	即 なし	然 なし
天台九祖伝	時 48	即 なし	然 なし
浄土往生伝	時 48	即 なし	然 なし

（「なし」は使用数上位50位以内に当該漢字がないことを示す）

のようになっている。三字の使用を探要法花験記の場合と比較すると、いずれも順位を下げており、中国漢文と探要法花験記とでは、これら三字の使用において違いがあることが分かる。

○「之・也・者・而・於・矣」

表①②の結果と近い結果が現れているようである。出典資料との直接的な比較では「特徴的」と認められた「也」も、中国漢文5資料の中では比較的多用する資料が多いようである。寧ろ法華伝記が他に比べても使用が少なくなっている。他の助字については、大きく異なるところはないようである。

この結果からは、対象とした中国漢文の「平均的な姿」に探要法花験記が近づいている（正格漢文への志向性が強い）と捉えることもできるかもしれないが、出典と近似した文章にあって、敢えて「也」を添加するという姿勢は、和化漢文側の「和」への志向性の表れであるという可能性も否定はできないと考える。但し、この点を述べるためには、一見すると正格漢文の規範の中にある用字の内実が、実は日本語文の表記に則ったものであるということを証明していく必要がある。今後の課題としたい。

五、むすび―「和化」事象の質的記述に向けて―

醍醐寺蔵探要法花験記の日本・中国両部から、指標となる漢字表記を抽出して、出典資料との比較を行った。その結果、探要法花験記は異なる二つの出典を持ちながらも、それぞれの出典の用字を独自の「用字基盤」とも言うべき共通のものに近づけようとする姿勢があることが分かった。具体的には接続詞的用法を担う「時・即・然」と文末の助字「也」である。但し、探要法花験記と近い性格を持つと考えられる中国漢文資料との比較から、直接的に「和化」と結びつくと考えられるのは前者の変化（接続詞の増加傾向）であった。「也」の出典と比較した場合の増加の問題については、「和化」との関連性を直接指摘するには至らないことが分かった。

しかし、この度の結果から、和化漢文研究の持つ問題点の一つが明らかになったと考えられる。正格漢文との違いを記述するところから始まり、それが日本語文を表記するための様々なくふう

の跡であることが証明されてきた和化漢文研究であるが、「正格漢文」の表記システムからの距離を問題にするだけでは見えてこないものがあるということである。正格漢文の規範の中にあるように見えるものの中に、実は日本語文化（和化）を遂げているものがあるかもしれないという点については、今後解決すべき問題が多く存しているように考えられる。

注

*1拙稿「注好選・探要法花験記の漢字使用―その量的構造」（『ことばとくらし』第一五号、二〇〇三年一〇月）など

*2本稿では、探要法花験記のうち日本撰述にかかる説話を出典に持つものを「日本の部」、中国撰述にかかる説話を出典に持つものを「中国の部」と仮称する。

*3指標漢字を抽出して、複数の資料を比較する方法は峰岸明氏「平安時代記録文献文体試論―用字研究からの試み―」（『国語と国文学』五一4、一九七四年四月）等において用字から見た古記録相互の文体研究として行われている。

*4これらの「変化」については、拙稿「醍醐寺蔵探要法花験記と東大寺図書館蔵法華経伝記―和化漢文資料とその出典との関わりについて―」（『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』汲古書院、二〇〇六年三月）において考察している。

*5「醍醐寺蔵探要法花験記における「也」の用字」（第八十三回訓点語学会研究発表会、二〇〇〇年十月）および注4論文。その際、参考にさせていただいた論文は以下の通り。

坂詰力治「法華百座聞書抄における助動詞について」（小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』一九七五年三月）

小林芳則「中山法華経寺本三教指帰注の文章と用語」（『国文学攷』第七二・七三合併号、一九七六年十二月）

佐々木峻「中山法華経寺本三教指帰注に於ける文頭の表現法」（『中山法華経寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』武蔵野書院、一九八〇年八月）

菅原範夫「中山法華経寺本三教指帰注の注釈の諸形式」（築島裕小林芳規編『中山法華経寺蔵本三教指帰注総索引及び研究』所収、一九八〇年八月）

*6注4拙稿

○調査文献および使用テキスト

○探要法花験記（『醍醐寺蔵探要法花験記』）○法華経伝記（出典として）（東大寺図書館蔵本［大治五年写］）○大日本国法華経験記（『大日本国法華経験記校本・索引と研究』）○法華伝記（全文）・華厳経伝記・大唐西域求法高僧伝・天台九祖伝・浄土往生伝（『大正新脩大蔵経』テキストデータベース）

*テキストに存する訓点は、論旨に直接関わらない限りこれを省略した。

○ 日中両出典と探要法花験記の漢字使用比較対照表（表①）各資料の漢字の使用頻度の高いものから順に掲げてある。

（法華経験記＝大日本国法華経験記　探・日本＝探要法花験記日本の部　法華伝記　探・中国＝探要法花験記中国の部）

	法華経験記		探・日本		法華伝記		探・中国			法華経験記		探・日本		法華伝記		探・中国	
1	法	849	法	212	法	144	法	179	51	念	180	乗	46	在	35	七	47
2	不	681	人	196	誦	125	花	160	52	夢	178	夢	45	得	35	上	46
3	人	644	一	177	不	117	人	149	53	者	177	間	44	七	34	道	46
4	經	640	不	155	人	112	經	142	54	云	176	子	44	衆	34	言	45
5	一	497	經	155	花	108	不	140	55	作	176	持	44	道	34	寺	45
6	有	461	花	128	經	106	日	139	56	事	173	願	43	汝	34	衆	45
7	華	431	之	126	生	90	也	137	57	道	173	比	43	説	33	説	45
8	誦	413	也	122	一	87	一	136	58	天	169	又	43	若	32	在	44
9	生	405	有	117	有	83	時	126	59	第	169	女	42	方	32	若	44
10	此	402	日	112	而	79	大	123	60	妙	166	念	42	受	31	五	42
11	其	354	生	109	天	75	誦	122	61	得	166	妙	42	心	31	受	42
12	心	334	時	104	之	71	之	113	62	住	165	往	41	明	31	明	41
13	大	316	大	100	以	70	者	110	63	即	161	可	41	下	30	已	41
14	之	316	誦	99	聞	67	即	109	64	知	158	今	41	故	30	云	40
15	日	316	即	98	中	66	佛	109	65	上	156	而	40	年	30	香	40
16	僧	300	此	97	大	65	有	107	66	世	156	於	39	我	29	又	40
17	是	295	我	96	佛	65	生	106	67	二	153	事	39	後	29	國	40
18	見	289	以	89	三	63	是	105	68	夜	153	明	39	講	29	自	39
19	我	287	是	86	十	63	以	100	69	出	152	夜	39	上	29	出	39
20	所	277	佛	86	是	63	天	100	70	寺	150	世	38	八	29	淨	39
21	以	271	見	84	見	61	師	94	71	語	142	門	38	門	29	二	38
22	佛	269	聖	84	爲	59	三	90	72	音	140	雖	38	州	28	然	37
23	來	268	僧	82	如	56	如	90	73	食	139	丘	37	入	28	僧	37
24	時	261	其	80	此	54	而	87	74	當	139	若	37	本	28	方	37
25	持	249	來	79	師	54	王	85	75	可	137	下	36	夜	28	願	36
26	山	248	天	76	日	54	中	85	76	依	133	修	36	願	27	供	36
27	十	243	心	72	於	52	聞	77	77	從	132	當	36	吾	27	四	36
28	年	243	後	68	時	52	來	77	78	修	131	依	35	淨	27	世	35
29	身	238	日	66	身	52	我	74	79	今	130	言	35	觀	27	門	35
30	行	232	年	66	其	52	此	74	80	而	130	五	35	火	26	本	34
31	讀	228	聞	62	釋	52	其	73	81	往	129	四	35	業	26	八	33
32	三	227	者	61	寺	50	十	68	82	善	127	然	35	語	26	餘	33
33	爲	226	山	60	所	49	於	66	83	部	123	部	35	四	26	諸	32
34	矣	224	入	60	來	49	見	65	84	去	121	聲	35	地	26	知	32
35	無	223	所	58	王	48	至	65	85	數	121	還	34	沙	25	業	31
36	子	219	師	57	行	47	爲	64	86	更	120	向	34	諸	25	千	31
37	門	219	爲	57	者	47	身	63	87	汝	119	告	34	母	25	苦	30
38	聖	215	身	55	無	47	等	61	88	乘	118	寺	34	夢	25	今	30
39	言	210	无	53	至	44	无	59	89	間	118	住	34	還	24	住	30
40	後	207	道	52	僧	44	所	58	90	女	116	二	34	世	24	入	30
41	聞	201	行	51	自	41	年	56	91	死	114	自	33	彌	24	夜	30
42	至	199	如	51	山	40	行	55	92	明	114	諸	33	緣	23	養	30
43	師	199	深	50	出	40	得	54	93	力	113	淨	33	光	23	火	29
44	中	191	讀	50	即	40	日	54	94	觀	111	語	32	知	23	皆	29
45	入	189	三	49	日	40	後	52	95	已	108	上	32	餘	23	持	29
46	國	188	十	48	已	39	汝	51	96	發	108	等	32	苦	22	成	29
47	於	187	出	48	二	38	矣	51	97	受	107	得	32	持	22	悲	29
48	沙	183	中	47	也	38	山	50	98	菩	106	從	32	品	22	何	28
49	也	180	作	46	憙	37	故	48	99	若	105	力	31	又	22	可	28
50	如	180	至	46	言	35	心	48	100	願	105	卷	30	問	22	家	28

○中国における仏家「伝」における漢字使用（表③）

法華伝記		華厳経伝記		求法高僧伝		天台九祖伝		浄土往生伝	
法	856	之	430	之	234	師	130	佛	582
不	782	十	266	師	202	之	123	而	416
經	718	經	261	而	177	不	105	不	396
一	708	不	231	人	156	法	99	人	386
人	681	法	225	國	130	大	94	生	385
之	671	一	224	有	128	以	89	之	366
有	616	華	223	法	126	有	77	念	364
華	587	有	218	於	123	日	74	日	363
十	581	大	201	寺	121	其	73	淨	333
而	463	嚴	196	也	110	十	71	一	255
其	449	人	194	不	108	人	70	見	242
以	441	師	192	十	98	一	68	有	221
大	428	以	181	大	94	於	66	土	215
爲	421	其	180	者	93	道	65	日	206
見	416	於	168	年	90	也	65	無	194
誦	409	所	168	州	89	者	63	十	191
三	388	此	160	經	86	而	62	者	185
日	382	而	160	一	85	爲	57	西	178
中	381	寺	156	其	85	行	56	以	177
二	367	也	156	爲	83	無	55	於	171
者	365	三	154	羅	80	門	54	其	170
此	364	年	153	三	77	至	53	爲	168
無	351	至	148	既	74	此	52	大	162
生	334	爲	134	是	74	二	51	心	156
如	322	無	131	行	73	天	49	往	154
所	318	後	130	西	72	三	47	彌	153
釋	317	日	127	至	71	年	46	年	151
王	312	二	125	所	71	王	45	三	149
是	312	日	120	遂	69	所	45	也	148
於	311	門	120	在	68	心	44	行	146
僧	306	僧	116	以	67	日	44	師	145
時	297	中	113	五	66	寺	43	化	143
至	283	卷	112	王	65	見	40	法	142
師	280	時	106	此	65	山	40	至	141
佛	275	山	105	矣	64	是	40	陀	140
來	272	是	105	律	62	如	40	明	137
年	270	見	101	天	61	經	39	二	135
聞	269	自	98	僧	60	入	38	中	134
天	264	道	98	無	59	龍	38	如	132
出	257	乃	98	乃	58	自	37	坐	131
寺	254	天	94	云	57	觀	37	自	129
即	247	遂	90	心	57	華	35	矣	129
得	244	釋	90	復	56	後	35	後	126
也	242	行	88	唐	55	生	35	宋	125
門	241	如	88	那	53	學	35	子	121
道	240	方	88	餘	53	世	33	然	121
後	236	餘	87	中	52	切	33	方	121
日	235	出	86	道	52	言	32	云	119
五	230	者	85	南	52	時	32	時	119
在	225	來	82	梵	52	衆	31	經	118

○法華伝記
唐・僧祥撰
（史伝部第 51 巻、2068）
○華厳経伝記
唐・法蔵
［貞観 17-先天元（643-712）］撰
（史伝部第 51 巻、2073）
○大唐西域求法高僧伝
唐・義浄天寿 2（691）撰
（史伝部第 51 巻、2066）
○天台九祖伝
宋・士衡嘉定元（1028）撰
（史伝部第 51 巻、2069）
○浄土往生伝
宋・戒珠
［熙寧年間（1068-1077）寂］撰
（史伝部第 51 巻、2071）

＊『大正新脩大蔵経』における収載巻と文献番号を付す。

＊データはいずれも『大正新脩大蔵経』テキストデータベース（大蔵経テキストデータベース研究会）により公開されている本文テキストデータを基に計上したものである。